

代 表 者

谷本

研 修 報 告 書

平成30年3月12日

各 会 派 代 表 者 殿

呉市議会議員

谷本 誠一

次のとおり研修に参加したので報告します。

1. 研修期日

平成30年3月10日（土）

2. 研修項目

赤峰勝人講演会 2018 広島「循環のはなし」

3. 参加議員

谷本 誠一

研修場所：広島市

研修報告書

平成30年3月12日

会派代表者殿

呉市議会議員 谷本誠一

次のとおり研修に参加したので報告します。

■研修項目

百姓 赤峰勝人講演会
演題＝土の命・人の命「循環のはなし」

■研修団体及び講師名

広島なずなの会
赤峰勝人 なずなグループ代表

■研修日

平成30年3月10日（土）午後1時～午後3時45分

■研修目的

無農薬・無化学肥料の有機栽培による自然農法を学ぶ。

■研修内容

赤峰講師は農業高校を卒業後、農業に54年間従事。その間借金を抱える中、実に無農薬栽培に取り組み12年目、農業を始めて20年目にして完熟土壌による無農薬・無科学肥料による野菜作りを完成させた苦勞人です。

彼が確立した自然農法は、通常の農家から敬遠され、有機栽培者からも敵対視され、医療界からも敬遠されて来ました。それでも信念で今日まで啓蒙活動を継続されています。

さて、彼が発見した第一は、雑草は野菜作りにとって必要不可欠であったということです。雑草が作物の栄養分を吸収してその生長を阻害することから、農薬の一種である除草剤を散布しますが、これによって、土中の微生物が死滅し、栄養のない野菜にしか生育しないということです。私達はそれを日常食していることになりす。

何故雑草が生えるかといいますと、それは土中のカルシウムが不足しているというシグナルなのです。そこで、それを補うためにスズキが生えます。それを刈り取って土中に返し発酵させると、次なる段階としてスギナが生えて来ます。それを土に戻すとハコベ、ナズナ、カラスエンドウが生えて来て、その時々土中に不足しているミネラルを雑草自らが体を張って、それを補給するのです。こうして数年かけて野菜が元気に生育できる土壌を形成します。こうして完成した土壌にはどんな野菜も生育するといいます。

この考えは、世界初の無肥料無農薬リンゴを作った木村秋則さんと全く同じだと思いました。

赤峰氏は雑草のことを「神草」と命名し、それを作物生育を妨害する悪者に仕立て、除草剤という農薬を撒いている現代農業の愚を痛烈に批判されました。

また、フランスの学者ルイ・ケルブランが提唱した「原子転換」を解説。動物が排出した二酸化炭素を植物が吸収し、光合成を行うことでカルシウムを生成する原子転換を行い、酸素を排出するというのです。

第二は、作物の生育の源になるのは、土中の多種の細菌であって、これらが土中に棲息する昆虫の死骸や枯れ葉や枯れ草を食べてくれ、栄養のある土壌を作り出すといいます。このばい菌こそが、自然循環にとって欠かせない存在であり、彼はばい菌ではなく、「神菌」であると命名しました。

因みに、土の表面から深さ10cm以内に昆虫や微生物の90%以上が棲息しており、10a当たり3,000kg、即ち3%の微生物等が存在することになります。人間の体内にも同じく3%の微生物、即ち酵素が生きていて、血液を造成しているというのです。

ところが、化学肥料は無機物ですので、これを撒くことによって、土中の微生物、即ち有機物を死滅させていることを知らねばなりません。しかも輪をかけるように、殺菌剤、除草剤、殺虫剤、燻蒸剤等の農薬を撒いているのですから、正に現在の農業は自殺行為と言えます。

加えて、田んぼの水中にいた生物が壊滅しました。人糞肥料を使つての農法だった昔は、田んぼの中にどじょうまで棲息していたのです。農家はこの功罪にいち早く気づき、原因を突き止めなければなりません。

更には農薬や化学肥料により、最強の猛毒であるダイオキシンを生成するといひます。これは青酸カリの17万倍の致死毒性、サリドマイドの千倍の催奇形性を有しています。その上発癌性、肝臓障害、生殖障害まで引き起こします。男性の精子が激減し、子どもが生まれ難くなるという、現代社会の少子化の本質がここに隠されていました。認知症の多発要因にもなっていると、講師は豪語されました。

実際、彼の数人いる農業弟子は、どの方も3~5人の子女をもうけており、食改善こそが真の少子化対策になるのは明白です。

現在の農家は農協から化学肥料を購入し、これが農産物の生育に欠かせないと洗脳され、それによる副作用である、生育物の弱体化や病気を害虫から防除するために農薬を撒いているのです。化学肥料と農薬がないと農業はできない、との呪縛から未だ解放されていません。

第三の発見は、害虫も野菜作りにとって必要な存在であったということです。猛毒を持つ亜硝酸窒素を含んだ苦い野菜、即ち人体にとって悪影響を及ぼす野菜を害虫が食べてくれるという衝撃の事実です。つまり有機栽培で農薬を撒いていながら虫がつくのは仕方がないとの常識を覆しました。それは未熟堆肥状態のまま有機栽培をしていることに他なりません。つまり、無農薬有機栽培が正しい農業とは言えないということです。

そして赤峰氏は、この害虫のことを「神虫」と命名しました。

具体的にアンモニア臭のする土壌、即ちアンモニア態には亜硝酸化成菌が土中に棲息し、その後1ヶ月程度発酵させることで硝酸化成菌となります。これを亜硝酸態といい、この状態を未熟堆肥と呼びます。堆肥センターで売却している例えば牛糞堆肥は、この未熟堆肥なので、これでは不完全なのです。これで栽培した野菜は発癌性、催奇性があり、酸欠死状態で苦みがあるというのです。だから害虫にやられるという訳です。

その土壌を、それから更に1ヶ月程度発酵させて始めて完熟堆肥となります。これが赤峰氏が唱える無農薬無化学肥料での完成した作物であって、通常より大きく生育し、甘味があり美味しいといひます。

これらの三態土壌は、発酵過程によって、同じ窒素を含んでいても元素記号が異なるといい、その記号を具体的な示され、なるほど説得力がありました。ということは、有機栽培で虫が付く野菜というのは、完熟堆肥状態ではないこととなります。

ところで、同じ自然農法でも無肥料無農薬栽培もあります。自然に完熟土壌を作る方法だと思ひますが、これとの違いを講演終了後直接講師に伺うことができました。それは、アトピー性皮膚炎とかが治癒している実績で説明するしかないということです。

実際彼のもとには、全国から噂を聞きつけて、病院で治癒しない病を持たれた方が何人も多し寄せています。例えばアトピー性皮膚炎の女性が、なすな農園の土壌を体感し、空気を吸い、そこから収穫された農産物を食する生活に転じたところ、見事に治癒し、美女に変身したというのです。

つまり、病気を治すのは医者でもなく、薬でもなく、自分自身です。体内の免疫力を向上して自然治癒するのですが、それは食生活から変えて行く必要があるのです。

その証拠に、恐竜時代には地球上から生命が滅亡するのが千年に1種だったが、高度成長期を堺にして、現代は僅か13分間に1種が絶滅しており、年間4万種が存在しなくなっているのです。これを生物多様性の減少といい、自然破壊の最たるものとされています。丁度化学肥料や除草剤の反乱が始まったのが昭和32年で、37年頃からアトピー性皮膚炎が出始めるのです。

化学肥料というのは、産業廃棄物から取れた元素を使って開発されたもので、植物に必要な元素であるから有用であるとの触れ込みでしたが、これらは無機物なので、動植物の死骸が発酵されて生成した有機堆肥とは、全く違うといひます。一言で言えば、無機には命が宿っておらずエネルギーがありません。化学肥料は無機質のアンモニア態窒素なのです。対して太陽熱で生成した有機アンモニア態窒素を発酵して完熟させることで、植物の浸透圧で水を吸い上げエネルギーに変えるといひます。

害虫に犯される作物とは、旬でないもの、化学肥料、即ち無機堆肥を使ったもの、有機堆肥でも未熟堆肥中の亜硝酸態窒素を含んだものということです。

結局、赤峰式自然農法とは有機循環農法のことであり、草、菌、虫との共生を図るため、草を育成して完熟土壌を生成した上で生産活動をするということなのです。

一方、昭和47年に施行され、平成7年まで続いた塩業近代化促進臨時措置法、いわゆる塩田法についても触れられました。「人間は塩なくしては生きることができない。自然

海塩であれば、1日18～19g摂取するべき」と説かれました。

同法により塩田での自然塩精製が禁じられ、専売公社の独占体制となりました。それ以降食卓に載る食塩は塩化ナトリウム99%の工業塩に変わったというのです。自然塩が解禁された現在でも、安価という理由で食塩を調理に使っておられる家庭が殆どですが、この愚かな経済優先の国策により癌が多発したというのです。

後に、自然海塩は癌細胞を抑制する効果があったことが知られるようになりました。海塩は、結局森の豊かな土壌を経由した水が海に流れ込み、生成されたのです。よって多くのミネラルを含んでいて、人体もそれを必要としているのです。

行政による誤った減塩政策により、健康が却って害され、医療費増に繋がっていることを喝破する必要があります。

また、玄米食の重要性を説かれました。白米と違って栄養素がたっぷりあり、根（陽）と芽（陰）による陰陽合体だといいます。玄米は元氣の源であって、玄米菜食を復活することが食改善のキーワードとも言えましょう。

最後に食の改善に関し、血液の生成について学説を紹介されました。従来の骨髓から血液が造られるという骨髓造血説は誤っており、小腸の絨毛から血液が造られるという、小腸絨毛造血説、いわゆる千島学説が正しいというのです。

化学肥料や農薬、食品添加物で汚染された食べ物を摂取すると、異常赤血球が癌を誘発し、異常白血球が白血病を誘発されると主張されました。

例えば、小麦は海外から87%を輸入していますが、その間腐らないように、防腐剤等が注入され、これが人体に悪影響を及ぼしており、癌の誘発に繋がっていると論じられました。ということは、食物は地産地消が原則であり、TPPはそれと逆行し、食糧安全保障を崩壊させ、多国籍企業支配を誘引する愚策であると思いました。

私は、食や農業から自然本来の姿に戻さねば地球環境は救いようがないことを改めて整理させられ、今後の改革の必要性を痛感したところです。

■質疑応答

- ①有機肥料に鶏糞を使っているが、害虫がついている。どうしたらよいか？

【答弁】

それは未熟堆肥の状態なので、そこから更に発酵させて完熟堆肥にすればよい。

- ②スーパーやホームセンターで打っている野菜や果物の種や苗には農薬が含まれているが、無農薬の種や苗はどうやって入手したらよいか？

【答弁】

それは、現状において不可能である。

そこから育成させ、徐々に完熟堆肥化することで、土壤そのものを時間をかけて肥えたものにする以外ない。

- ③土壌に灰を混ぜる方法はどうか？

【答弁】

灰は最高のミネラルで、窒素以外殆どが含まれている。酸性土の中和効果もある。

- ④子どもへの玄米は悪いという声も聞くが、どう考えたらよいか？

【答弁】

完熟堆肥且つ無農薬の玄米でないといけない。先ず舌を玄米に慣れさせるために、最初は白米と玄米を1対1でブレンドし、その中に、米一升に対し20gの自然海塩を入れると効果が増す。

- ⑤海を浄化するにはどういう方法がよいか？

【答弁】

宇部市の新野恵氏が竹炭を活用して海の再生に取り組んでおられ、参考になる。種子島の海岸で特産のトコブシが棲息しなくなったとの情報もある。森と海は繋がっており、「森は海の恋人」とも言われるように、先ずは原因となっている森の浄化に取り組むことが肝要である。

- ⑦上流域で農薬・化学肥料栽培をされると、下流域で無農薬・無化学肥料栽培を実践しようとしても、汚染水を田畑に引かざるを得なくなる。どうしたらよいか？

【答弁】

化学肥料や農薬は土中に付着して残るため、水にはあまり影響がないので、気にしなくてもよい。

- ⑧鶏を飼っているが、親鳥が産み落とした卵を食べている。どうしたらよいか？

【答弁】

カルシウム欠乏を自ら補うために、栄養補給している。餌に雲母を与えるとよい。

雲母は軽石の中にあり、蛎殻を砕いて餌にしてもよい。

- ⑨発酵と腐敗はどちらがうのか？

【答弁】

発酵とは陰性から陽性への転換で、熱を帯びるが、腐敗は陽性から陰性への転換で、熱を帯びない。前者は草、後者は肉が代表例。

⑩認知症と塩の関係は？

【答弁】

認知症は主に自然海塩の摂取不足と深呼吸不足が原因である。日本人は穀物を多く摂取するため、自然海塩を一日18～19g摂り、脳に酸素を送ることで、効果を現す。

■呉市での展開の可能性

①農業振興センターで、自然農法を実演し、農家を指導すべきである。

同センターでは国策に従い、減農薬がせいぜいであるので、考えを改めるべき

②誤った減塩啓発をやめ、特産の藻塩やひめじきの塩を大々的に宣伝すべきである。